



CLUB HARLEY

シーズン開幕!!
ツーリングはドコに行く?

Ride the HARLEY-DAVIDSON.



第2特集

ボクらが知らない
アレン・ネスの革命

走れ!
！

特集

自分だけの、あの道で
THE OPEN ROAD

海へ。



アレン・ネスが日本人に与えた衝撃!

「ハーレー界の重鎮が語る」



岡本さんが教科書のように読み込んだ'94年のカタログは後年、ネスとコーリーにサインを入れてもらった

証言

Arlen Ness Wonderful Stories

アレン・ネスの登場はその後のハーレーカルチャーに強烈なインパクトを与え、それは日本にまで波及した。その時代を知る人々に、当時の衝撃を証言してもらった。

「現代のカスタムはすべてネスが通った道の延長にあると思う」

証言

ネ

スファンを公言し、彼が制作した車両も所有するトライジャの岡本さん。

岡本さんが初めてハーレーを手に入れたカスタムを作り始めた'94年頃は、まだハーレー用のカスタムパーツが日本にはあまりなかったそう。その中でアレン・ネス社が自社製品だけのカタログを制作しているのを知って衝撃を受けたと言う。

「当時はカスタムの情報なんか全然あれへんかった。だからネスのカタログに載っている車両が教科書やっだね。今はネットを見たり先人が作った物をマネすることができると、ネスは何も無いところから新しいものをクリエイトしてたんやからすごい。グラスファイバーで外装を作っていることもホンマにカルチャーショックやったわ。大げさではなく、僕も含めて今のビルダーたちが作っているカスタムは全部アレン・ネスがすでに作ってきたスタイルをマネしてるに過ぎないって思う。どんなに新しく見える物でも、昔の雑誌とかネスのカタログを見返すとどこかにそれに似た物があるから。でも



TRIJYA

トライジャ 岡本佳之さん

美しいデザインと乗り物としての信頼性を両立するカスタムを信条とし、多くのショーでアワードを獲得。その親切な人柄と丁寧な仕事ぶりに惚れ、カスタムを依頼する人も多い

それはしやあない、彼がすご過ぎるんやわ。僕はネスや他の先人が作った良い物を取り入れていくしかないんやから。僕は本人に言うたよ、あなたがいなくなったら今のショップをやつてなかつた」って。

ハーレーカスタムをビジネスとしても確立したアレン・ネス。彼がいなければ今日のように世界中のビルダーが数多のカスタムを制作する時代はやつてこなかつたらだろ。



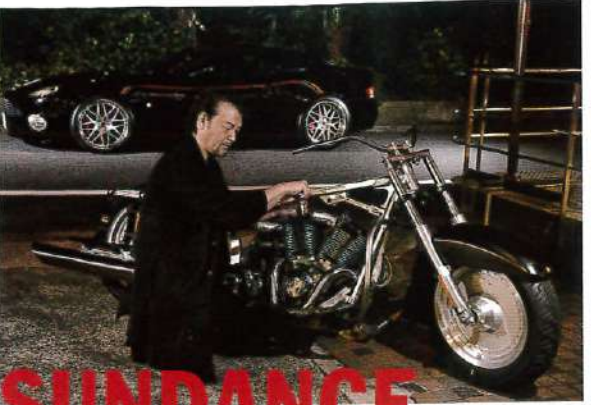
過給器を装着するのもアレンの得意とするカスタム手法。ドラッグ風のスタイルによく似合っている



ランプを埋め込んだフラットボブフェンダーは、当時カタログに同じような形状のパーツが掲載されていた。ネスらしいディテールと言える



トライジャにあるのは'94年カタログに掲載されていたピンクネス。少しだけ日本仕様アレンジしている



SUNDANCE ENTERPRISES

サンダンスエンタープライズ 柴崎「ZAK」武彦さん

技術力の高さはもちろん、豊富な知識による、独自の視点から生み出されたオリジナルパーツは、世界中のハーレー乗りから注目されている

「イチから作り上げたフルカスタムにも、「ハーレーらしさ」があった」

証言

僕

がLAにいた'70年代後半、当時住んでいたハリウッド付近ではチョップパーは黒人の乗り物。彼らのスマートな姿が最高にかつこよく、逆に白人はボチャツとした体型のやつが多くてカッコ悪いと思った。でもネスはスマートでハンサム。こんなかつこいい白人チョッパー乗りがおるんかと驚いたわ。カスタムもおもしろかったな。ビルダーと言うよりアーティストやった」

'95年に岡田さんはネスを日本で広めようとパーツの輸入代理店も



SEMBA

船場 岡田学さん

ヴィンテージハーレーのオーソリティとして国内外で知られる岡田さんだが、実はチョップパーも大好き。'70年代にLAで暮らし、当時のカスタムシーンを間近に見ていたという

手がけ、東京ドームで実施したバイクショーでは本人を来日させた。「まだ日本では少数のチョップパー好きくらいしかネスを知らなかったんやけど、日本に呼ぶほどの価値があるのはネスしかおらんかった。それくらい傑出した存在やつたよ」

僕

が'82年に「サンダンス」をスタートさせた当時は、まさしくネスの黄金期でした。数々のカスタムショーを総ナメにして、時代の新生児というか、カスタム界のニューウェーブといえる存在だったんです。

ハーレーのタンクをストレッチしたり、フェンダーを前後逆に付けたり、XLCRのフェンダーを違うカスタムに使ったりとか、ハーレーのデザインコンポーネントを上手に使いながら、斬新なスタイルを作った。原型のないカスタムなのに、ハーレーらしいという。そうしたことを無視して造つたら、ハーレーではなくなってしまうよ。そんな彼の考え方は、僕の中でも基本になっています。そしてショーバイクであれ「走る」こと。乗り物なだけに、それが最も重要ですよ。



1920年代にドラッグレーサーがあったら...というコンセプトで'97年に製作した「ワイルドオーブ」は、ネスからも「一番好きなバイク」と絶賛された

証言

「彼はビルダーと言うよりアーティストやった」



東京ドームのイベント会場で撮影した一枚。ネスも非常に喜んでたそう

'80年代、まだ日本にエイブハンガーがなかった時代に岡田さんはこの車両を輸入

